

発行元
東京新聞
南千住専売店
Tel.3803-1781
発行責任者
鬼塚 佳代子
Tel.090-2657-0300



すまいるたん

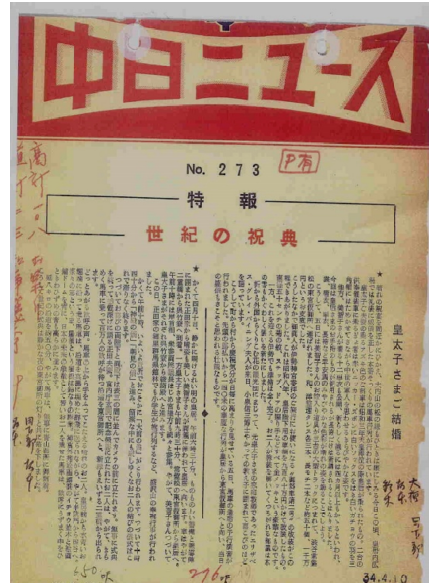


第411号
平成31年

2月13日

昭和三十四年四月十日
中日ニュース 特報 世紀の祝典

昭和三十四年四月十日の中日ニュースです。



皇太子さまのご結婚

★晴れの祝宴を間近かにひかえ、大内山の松の緑もひとときわ眼にしみる今日この頃、皇居内広場では礼装に威儀を正した本番そつくりの馬車行列が行われています。

皇太子ご夫妻の乗るアズキ色のご料車は昭和三年天皇即位の際皇后が乗られたもの。二台の供奉儀装車に乗るぎよ者は赤いニッカー・ズボンに白いソックスをはき白いガチョウの羽を三角帽にはためかせてさながら中世の軍人をおもわせるきらびやかな姿です。

他方、美智子さんが着る十二単衣も公開新しく織るには四カ月以上かゝるといわれ、今回は皇后さまのお手持のものが使用されるが長袴だけは新調されることになりました。裳、唐衣、単衣、長袴など平安朝のみやびやかな色彩が晴れの姿を飾ることでしょう。

う。

こうして五日には美智子さんのお嫁入り道具が三台の大型トラックにつままれて、渋谷常磐松の東宮仮御所へ運ばれました。和、洋整理解ダンス各三本、長モチ二本など約五十個、一千万円というお支度でした。

こうしたなかで御両人が伊勢神宮参拝のご旅行にお使いになる“御料車第二号”の改装がこの程できあがりしました。これは昭和八年、皇后陛下用の車輛を九百八十万円かけて改装したものです。直径五十七センチの菊の紋、ステップ、ドアの握り手などすべて金メッキという豪華なものです。

一方、これを迎える伊勢でも準備は全く完了。お二人が旅装を解いてくつろがれる部屋は木の香もかぐわしい装いを新たにしました。折から外国からくりこむ花の觀光団にまじつて、元皇太子さまの家庭教師であったエリザベス・グレイ・バイニング夫人が来日、小泉信三博士やかつての教え子に囲まれて喜びのほどを語っています。

こうして町から村から慶祝気分が日毎に高まりを見せている五日、馬車の最後の予行演習が行われました。先頭の露払いから一四〇米の華麗な行列が皇居から東宮仮御所へと向い、当日の盛儀もさこそと思われる壯観なものです。

★かくて四月十日、静かに明けるれい明の皇居。午前六時三十分、ものものしい警備と報道陣に囲まれた正田家から晴姿も美しい美智子さんが両親に伴われて皇居へ向います。車はやがて二重橋から呉竹寮へ到着。一方皇太子さまも午前九時三十分、常磐松の東宮仮御

所から皇居へ。午前十時には岸首相、衆参両議院議長はじめ宮様方も続々と参集。やがて、美智子さんつづいて皇太子さまがそれぞれ呉竹寮から綾綺殿へと進みます。

この日、正田家の郷里群馬県館林でも小学生が旗行列するなど、盛沢山の奉祝行事が行われました、

かくて午前十時、いよいよ賢所でおごそかに「大前の儀」がとり行われます。四十分から「神殿の儀」「朝見の儀」と進み、簡素な中にも厳しゆくなお二人の結びの儀式はこれで滞りなく終わります。

つづいてお喜びの両陛下と両殿下は表三の間に並んでカメラの前に立たれます。無事に式典が終って感慨深げに語る正田夫妻。宮内庁玄関で記念撮影に立たれたお二人は、やがて、きらめく馬車に乗って百万人の歓呼が待つ沿道を東宮御所へと、新緑もえいずる二重橋から出られます。

どつとあがる歓呼の声。馬車の上から手をふつてこたえる晴れのお二人。皇居前から水青いお堀端に沿って走る馬車は、沿道を真黒に埋めた群衆に送られながら、やがて半蔵門から四谷へ。家々の窓という窓、屋根という屋根は鈴なりの群衆。神宮外苑絵画館前のイチョウ並木と絵画館ドームを背に、日本の未来の象徴として若いお二人を乗せた馬車は、歓呼にうずまく中をひとときわひずめの音も高らかに進みます。

延八キロの沿道を約五〇分、やがて馬車は、無事に青山御所に御到着。こうして世紀の式典は静かな夜の東宮御所の灯りと共に幕を下しました。

